

癒し系

久保田世緒

以前勤めていた会社の後輩から「癒し系の顔ですよ」と言われたことがある。

いろいろな雑誌で「癒し系」の女性になるうという記事が載っていて、本当なら喜んでいいはずなのだが、私はどうしても喜べなかつた。

「癒し系」という言葉があまりにも曖昧すぎて、どう捕らえていいのか分からない。それに、優香や井川遥など「癒し系」と呼ばれるタレントはグラビアから出てきて、確かにきれいだけれど、最初は体ばかりが強調されて、顔はあまりぱっとした印象がなかった。

特徴がないので、「癒し系」という言葉でごまかしているのではないかと思っていたのだ。

ものすごく美しい人は、「近づき難い」とは言われることはあっても「癒し系」と呼ば

れることはない。

自分は決して美人だとは言わないが、人からはつきりと「美人じゃないよ」と言われれば、やっぱりがっかりする。

それになによりも、そのころ私は「人を癒している場合じゃない」と、常にいらいらしていたのだ。

二十代も後半に入っているのに、仕事は面白くない。しかしやりたいことも見つからない。今この二十代のうちに、何でもいいから足がかりを作っておかなくては、この先自分の人生はだめになると焦っていたのだ。

そのころは、あまりにも大きくて立派な将来像ばかりを追い求めていた。

人と会っておしゃべりすることよりも、家で美味しいご飯を作って食べることよりも、将来のために勉強しなくてはと思っていた。

それが趣味でエッセイを書くようになったから、ずいぶんと考え方が変わった。

近くのものを見るようになった。すると、

きれいな草花もあるし、大切な人が身近なところにかくさんいた。

ほんとに小さなことでも、楽しむことはできるし、生活が豊かになるのだと気が付いた。

この前、テレビを見ていたら、女優の財前直美が「最近左手文字にはまってるんです」と言っていた。右手で文字を書くと、どうしてもきれいに書こうという意識が働いてしまう。しかし、左手で書くと「この空間にどう文字を埋め込むか」という考え方になるのだと言う。

そう聞くと、やってみずにはいられない。

次の日、会社にいくと同僚が珍しくスカートを着いていた。そこから伸びる足がすごく色っぽい。だけどよく見ると、そのスカートは裾からちらちらと絆創膏が覗いている。角に腿を引っ掛けてしまったそうなのだが、その色っぽい足に貼ってある絆創膏がすごくかわいらしく見えた。そこで、メモに筆ペンを左手で持ち、

「今日は足の絆創膏がかわいいね」と書いて、そつと彼女の机の上に置いてみた。文は、全く面白くもなんともない普通の言葉なのだが、慣れない左手で書いてみると、いい味がでる。

彼女も気に入って、その日からお互い、左手文字を書いて交換している。

彼女は、「癒しをありがとう」と書いてくれた。少し前の私なら、「癒し」なんて言われると嫌な気持ちになっただろう。それなのに、その返信は素直に受け入れることができた。

きつと、毎日小さなことでも喜ぶことができるようになって、気持ちが穏やかになったからだろう。

彼女は、いつも夜中まで仕事をしている。そんな忙しい人が、私を見ていい気持ち、楽しい気持ちになってくれるならいいじゃない。

今では「うちの会社の癒し系」と皆に言わ

れるようになってしまった。

うん、それもなかなかいいじゃないか。